



地域の子どもたちの幸せを願う人たち

〜しびの会〜

1984年7月に発足してから、地域の子どもたちに読み聞かせや人形劇、紙芝居などの活動を続けているしびの会。代表の川口真紀子さんは、「幼少期の環境が人間性の育成にとっても大切です。子どもの真剣な眼差しに魅せられて、ここまで続けてくることができました。この活動を若い人たちにつなげていきたい。」と話してくれました。



光の子保育園で

☆一緒に活動してくれるお母さんを募集中です。



図書館を普段から利用している 村中煌汰^{こうた}くん、由紀子さん。「毎日、絵本を読み聞かせています。本を通して、親子のふれあいができます。今では、自分で読んでほしい本を持ってくることもあります。お父さん、おじいちゃんやおばあちゃんも読み聞かせをしています。」



こんな場面もありました・・・
左 沢村優衣ちゃん
右 村中煌汰くん

赤ちゃんは抱っこが大好き！

お母さんの膝の椅子でぜひ読み聞かせてほしい。

図書館からのおすすめ絵本

(赤ちゃんのための絵本20)

七尾市立図書館では、赤ちゃんがはじめて出会う本（ファーストブック）をたくさん取り揃えています。お近くの図書館でお気に入りの一冊を見つけてください。

	書名	作者	出版社
1	いないいないばあ	松谷みよ子文 瀬川康男絵	童心社
2	おつきさまこんばんは	林 明子	福音館書店
3	びよびよびよ	平野 剛	福音館書店
4	がたんごとんがたんごとん	安西 水丸	福音館書店
5	はねはねはねちゃん	神沢利子文 山脇百合子絵	福音館書店
6	もうおきるかな	まつのみさこ文 藪内正幸絵	福音館書店
7	たまごのあかちゃん	神沢利子文 柳生弦一郎絵	福音館書店
8	うさこちゃんシリーズ ちいさなうさこちゃん	ブルーナ文・絵 石井桃子訳	福音館書店
9	くつくつあるけ	林 明子	福音館書店
10	ころころころ	元永 定正	福音館書店
11	ずかん・じどうしゃ	山本 忠敬	福音館書店
12	きんぎょがにげた	五味 太郎	福音館書店
13	かささしてあげるね	長谷川摂子文 西巻茅子絵	福音館書店
14	こぐまちゃんえほん しろくまちゃんのほっとけーき	若山 憲	こぐま社
15	だっこして	西巻 茅子	こぐま社
16	よこむいてにこっ	高島 純	絵本館
17	もこもこもこ	元永 定正	文研出版
18	いちにのさんぽ	ひろかわさえこ	アリス館
19	ほうし / ピンポーン	中川ひろたか文 荒井良二絵	偕成社
20	まついのりこあかちゃんのほん じゃあじゃあびりびり 他2冊	まついのりこ	偕成社



あなたにとって、家族はどんな存在ですか

シリーズ4

家族の絆

親によるわが子への虐待や引きこもりなどの家庭崩壊、いじめや自殺・少年犯罪の低年齢化など、家庭や地域での子どもへの教育力低下が大きな社会問題となっています。七尾市と七尾市社会教育委員では、「家族の絆」をテーマにしたエッセイを募集し、入選作品を7月号からシリーズで紹介しています。

これらの作品を読んで、一人ひとりが「家族とは何か。」を考え、「お互いを思いやり、支え合う心」を育むきっかけになることを願います。

それだけでいいと心底思った。

家族の存在が当たり前すぎて、優しさに気づかない時がある。そして、自分が家族にどうあってほしいと想っていることも。どんな時も私を迎えてくれる家族へ、「ありがとう。」

優秀作品

「家族の在り方」

田鶴浜高等学校1年 今枝かおりさん

いつも近くにいる家族、一番身近な存在なのに、なぜか冷たい態度であしらってしまう私。「年頃だから」の、その言葉が心の中にずっとある。



確かに、そうなのかもしれない。家族よりも友達の前の方が素直になれると思った。今まで、ずっと私にとって、家族の存在より友達の存在の方が大きかった。しかし高校入学を機に、私の中の家族の在り方を考えさせられたことがあった。

高校入学の前日、私は祖母と激しく口論した。いつも優しく、私を守ってくれた祖母に、「どうでもしろ。」

と言い放された。私も負けじと言い返すが、その度に涙が出てくる。

「多分、見離された。」帰省しても私を出迎えてくれないんだと確信したからだろう。しかし、祖母と私は互いの気持ちを理解し合い、祖母も翌日の入学式を温かく送り出してくれた。

「また、帰っておいで。」この言葉を私に贈って。当たり前のことなのに、私にとってその一言は心から嬉しく思えた。帰る家があって、そこには家族がいて、みんな笑っている。ただ、

優秀作品

「家族のぬくもり」

東部中学校1年 林田侑里子さん

その日、私は友達の家遊びに行っていた。おやつもいただいて、楽しんだ。気が付いたらいつもより少し帰りがおそくなってしまった。歩きながら、「しまった。もうご飯の時間過ぎちゃった。」「けどいいや！そんなにまだお腹もすいてないし・・・。」と考えながら、家の扉を開けた。母がバタバタと走ってきて

「大丈夫だったの？」

「心配したじゃないの！」

と言った。続いて弟も、

「帰ってきたあ」

と歓声あげ、家中みんなに知らせに走っている。ふと食卓を見ると、おかずなどが並べてあり、

「あっ、まだ誰も食べてないんだ・・・。」

母が、

「さあ、ご飯食べるよ。」

と言っている。姉も、

「帰ってこなかったから、食べれなかったじゃん。」と言いながら、みんな次々と席につく。

「先に食べてればいいのに・・・。」と私が言うと、母は、

「何かあったのかと心配で食べ物のがのどを通らないでしょ。」「だから、安心して楽しい食事ができるように。」「みんながそろってからよ」と言う。弟も、「そうだよ。いっしょに食べた方がおいしいよ。」と続ける。私は、

「ごめんね。」と言い、何だかとても嬉しくて、お腹はあまり空いてなかったけど、全部食べた。どんなときも受け入れて見守ってくれる家族っていいなと、この時、改めて感じた。この先もずっと、温かく優しい家族でいたいと思った。



11月17日に七尾サンライズプラザにおいて開催する「学びあい、支えあい」七尾市民のつどいで上映する、最優秀作品のビデオ制作中！